日本語心理動詞文の刺激格の選択に表れる事態把握と客観的把握の相関

東北大学大学院　大槻くるみ

1. 研究の背景と目的

これまで格助詞の使用の背景には認知的スキーマが存在することが数多く論じられてきた（杉村 2002, 森山 2005, 岡 2007）。一方で、格助詞の選択に表れる事態把握についてはあまり論じられてこなかった。そこで本研究では、中古から現代の日本語心理動詞文で刺激格がニ、デ、ヲ格に分かれる〈なる〉表現（自動詞文など）における各刺激格の使用比率を明らかにし、客観的把握の指標である短歌の一人称代名詞（以下〈われ〉）の使用の通時的変化と比較する。そして、これらの間の相関の有無から、刺激格の選択には日本語話者の主観性が表れているのか否か、表れているのであればどの格に表れているのかを明らかにする。

2. 研究方法

はじめに、心的変化の経験者が主語である〈なる〉表現の心理動詞構文（①自動詞文、②感情の対象を目的語にとる他動詞文、③〈(経験者)が＋(経験者の身体部位・心など)を＋(心理動詞)させる〉の構造の文）における刺激格の使用頻度を調べた。研究対象の心理動詞は各時代を代表する作家、作品の総索引などから出現頻度の高い心理動詞 15 個を選び、コーパスからこれらの中古から現代にかけての口語体の心理動詞文を無作為抽出して〈する〉と〈なる〉の表現に分けた。そして、これらのうち〈なる〉表現の心的変化の刺激を表す格、ニ、デ、ヲ格それぞれの使用の通時的変化を調べた。次に、〈われ〉の明示頻度の変化から、日本語話者の客観的把握の傾向の通時的変化を明らかにした。佐佐木 (2007)が調べた中古の『古今和歌集』、中世の『新古今和歌集』における〈われ〉の使用頻度の結果に加え、近世から現代の短歌における〈われ〉の使用頻度を調査した。近世は『新編日本古典文学全集 73 近世和歌集』（小学館）の 1231 首、近代は明治・大正時代の歌人 20 人の歌集の冒頭 50 首を計 1000 首集めた。現代は『平成万葉集』の 1000 首を資料として〈われ〉の出現数を調べた。そして、心理動詞文の刺激格と〈われ〉の使用の変化の相関を分析した。

3. 結果と分析

以下の図 1 は〈われ〉の使用頻度の変化を調べた結果である。また、心理動詞文の〈なる〉表現における各時代のニ格、デ格、ヲ格の使用頻度を調べたところ、図 2 のようにニ格の使用の変化のみが〈われ〉の変化と類似した変化をしていることがわかった。この結果を受けて、〈われ〉とニ格の相関を分析した結果は、図 3 の通りである。

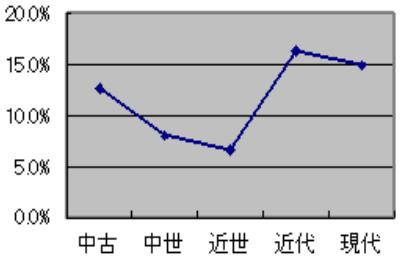

図 1　〈われ〉の明示比率の変化

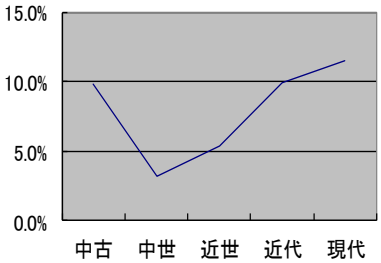

図 2　〈なる〉表現に占めるニ格の使用の変化

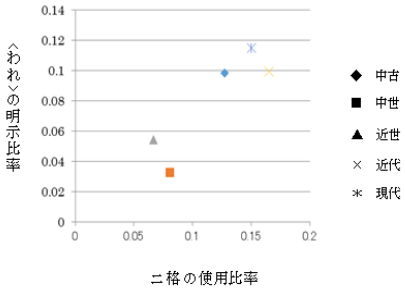

図 3　〈われ〉とニ格の相関関係

図 3 の散布図では、5 つの時代の値が左下から右上に向かって直線的に並んでいることから、〈われ〉とニ格の使用頻度には非常に強い正の相関があることが明らかとなった。この結果から、客観的把握の指標である〈われ〉と個体着目を表すニ格（中右・西村 1998）の使用の変化の間には強い相関関係があることがわかった。これを踏まえれば、〈なる〉表現におけるニ格は個体着目と同時に日本語話者の客観的把握の指標となりえると言えるだろう。今後は今回の結果を踏まえて考察を更に深めていきたい。

主な引用文献

佐佐木幸綱. 2007.『万葉集の〈われ〉』角川学芸出版.